

まんだら通信

第185号 (通巻216号)

平成23年(2011)11月 佛誕2577年 皇紀2671年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

開戦から七十四年の戦没者追悼式

穏やかな日よりの十一月四日午後、白浜フーラルホールで、南房総市と社会福祉協議会主催で、市長さんや遺族、来賓など四百人の関係者が集まって、大東亜戦争の戦没者追悼式が行われました。

私も選挙管理委員という役職柄、末席で参列しました。
広い舞台中央の『南房総市戦没者之霊』と書いた標柱を中心に、いかにも海にゆかりの深い市らしく、無数の小菊で飾った白波が、程よい照明の下で神々しいほどに綺麗でした。

昭和十二年からの日支事変を、当時の政府が決めた大東亜戦争に含めると、開戦から既に七十四年が過ぎたこととなります。その間、酷寒の満州で、ジャングルのイ



ンドシナ半島で、フィリピン島の島々や南海で戦死した南房総市出身の軍人軍属の方々は二千五百人あまりに上るといわれています。

この方々は皆、間違いなく一家の大黒柱です。心無くも大黒柱を失ったご家族の戦後のご苦労は、察するに余りあることです。

かけがえのない家族と国土を守るために身を捧げた、これらの方々の尊い犠牲があつたお陰で、今の私たちがいるということとは、忘れてならないことだと、あらためて思いました。

この式典は四年に一度行っているといふことですが、慰霊と同時に本今の平和を考へ直すきっかけにするためにも、将来もずっと続けて欲しいと思えました。

その大東亜戦争ですが、戦後六十年以上過ぎた今でも「あれは、軍部の野望で始めた無謀な戦で、日本が悪かったのだ」と思っている人が大勢います。

本日は、大げさな言い方ですが、アメリカのルーズベルト大統領が仕掛けた罠にはまった、というのが歴史的には正しいと思えます。戦後進駐してきた連合軍のマッカーサー総司令官は、日本が二度と立ち上がれないようにと、あの手この手で「日本悪者説」を日本人に植え付けました。

「日本悪者説」の極め付けは「東京裁判」ですが、勝った側の言い分だけで判決を言い渡すという、裁判の形をした、世界に通用しない田舎芝居のようなことをやりました。

連合国の裁判官のなれ合いの判決に従わず、日本無罪の判決文を書いたインドのラダ・ビノード・パールさんは「あのような、日本は徳川時代に戻れ」というような要求を受けたのでは(殆ど軍備のない)ルクセンブルク大公国やモナコ公国でも、武器をとって戦ったであろう」と言っていますし、マッカー

サーご本人が帰国後のアメリカ議会会で「彼らが戦争に飛び込んでいった動機は、大部分が安全保障の必要に迫られてのことだったのです。」つまり、日本は他国への侵略などではなく、身を守るために戦争をしたのだとはつきり言っていますね。

お陰で、東条英機さん初め多くの有能な人たちが処刑されましたが、今ならまだあの戦争についての資料が沢山残っていますから、そのつもりになれば誰でもすぐに本当のことを知ることが出来ます。

ところで、石井英夫さんといえは昭和四十四年から三十五年間、産経新聞の『産経抄』を担当された博識の名文家で、私が毎朝真つ先に読むコラムでしたが、最近の随筆集『いつときニッポン』で元文藝春秋の編集長 堤堯さんの、こんな話を紹介しています。

或る聖心女子大学の教授が、ご自分が担当する四十一人に聞いたところ、日本がアメリカと戦争をしたことを知らない学生さんが、何と半数の二十一人いたということです。

以前どこかで読んだ、電車の中で学生二人の話「お前、昔日本とアメリカが戦争したって知ってるかい」「え？ で、どっちが勝ったんだい」には、まさかそんなことかとは思って、どうやら戦争があつたことを知らない若者が本当にいますね。

聖心女子大学といえは、皇后さまや曾野綾子さんが卒業した名門中の名門大学だと思ふのですが、親御さんや学校の先生は何を教えて来たのでしょうか。

子育て中のお父さんお母さんは、戦争に限らず、意識して子どもたちに昔の話をし、てあげて下さい。お年寄りも「昔、こんなことがあつたよ」と、話題にしましょう。

心ならずも家族と離れて、田舎の家を守っているお年寄りは、手始めにお孫さんに絵手紙を描いてはいかががでしよう。「庭の熟れた柿をヒヨドリが食べています」とか「真つ青な海をカモメが飛んでいます」など。絵手紙は、「下手な方がいい」のだそうです。

◆立冬が過ぎても、毎日の気温の差の大きさは普通ではないように思えます。でも野山の気配はやはり晩秋。山芋の葉が鮮やかな黄に染まりはじめました。

山芋といえば、むかごがあります。色々の食べ方があるようですが、フライパンにバターを引いて塩コショウし、さっと炒めるとその香ばしさがたまりません。

ブラジルは世界の田舎むかご飯という俳句を何故か思い出します。

◆お陰様で10月1日～15日、6年に一度の巡礼が終わりました。お接待をして下さった皆さん、せめて1日だけでも行かなければと「普段着の巡礼」をした多くの方々のお陰で

した。ありがとうございました。紫雲寺では、巡礼の皆さんのお茶代や納経、おさい銭などで73,216円。お参りの人数は700人、費用は茶菓子代や花代などで42,240円でした。

長福寺、石戸寺は足の便の関係で、もっと少なかったのではと思います。6年後は沢山の巡礼さんがお参りできるように、一工夫したいものです。

◆今月の野草はイヌタデ(アカノマンマ)【たで科タデ属】です。原色牧野植物大図鑑には日本だけでなく台湾・朝鮮半島や中国などの道端などに生え、古代、大陸から渡ってきたものであろうといふこ

とです。

別名に赤のまんまという通り、子どもたちは嘗てままごとで赤飯に見立てて遊んだ、懐かしい野草ですね。「この頃は…」などという年寄りの繰り言になるから言いませんが、明るい秋空の下、敷いた蓆の上で楽しげに遊ぶ幼な子など、良い写真が撮れそうな気がします。

イヌタデはまた、辛味がなく食用にならないタデの総称であるとも書いてあります。

そういえば昔、どこの農家にも、辛みのためのタデが植えてあり、冷や麦のツマにしましたね。

2011.11.09 龍渉



余滴

にっぽん人情小噺 第七十話 酔っ払い

落語家 三遊亭鳳豊

最近駅員への暴力事件が多発しているそうですね。

「酔っ払い」が、駅員さんを殴ったり蹴ったりする事件が多いんだそうで、それだけでもみんなどれだけイライラしているか、よくわかるような気がします。

そう言えば先日、最終電車近くのローカル線で、ひどい「酔っ払い」の乗客を見ました。五十歳前後のいかにも風采の上がないサラリーマンが乗ってきて、座席がなかったため、あっちへウロウロ、こっちへウロウロ車内を歩き回っていたんですが、突然、その千鳥足がピタッと止まった。

見ると、電車のドアの手すりにつかまって流れゆく外の景色をぼんやり見ている三十代後半の女性を、その「酔っ払い」がじっと見つめているんです。見つめていると言っていると、恋しているかのように思えますがね、そうじゃない。まるで、獲物を見つけたトラのように、舌なめずりをして、「ニヤツ」と笑っている。トラは笑わない。

何か変なことが起こらなければいいが、と乗客たちも心配そうに見ていると、「トラ」はじわじわと女性のほうに向かっていく、女性は、まだ気がつかない。

痴漢行為でもしたら、飛びかかって助けてやるうと思っている乗客もいたでしょうね。それを察したのか、「トラ」は、振り返って、こっちを見ただけでなく、女性のほうを指さしているんですよ。

「へへへ……」

いやらしくそう笑うと、ウロウロと彼女のほうに向かっていき、近くまで行くと、声をかけたのです。

「ブス、よー、ブス、ブス」

ひどいことを言うもんですね。ようやく女性が「酔っ払い」に気がつき、近寄って来た「酔っ払い」の前をすりりと抜けて、別のドアの出口に向かいました。「酔っ払い」は、気を取り直して、また、彼女の近くに行き、今度はみんなに聞こえるように大きな声で言いました。

「おい、そのブス、ブス、お前、ほんとにブスだなあ」

さすがに女性もこれには怒りました。

「何よ、この酔っ払い！」

それはそれは、見事な一撃でした。彼女の大声は隣りの車両まで響きました。隣りの車両から、数人の乗客が入ってきたほどです。

「ウツ」

「酔っ払い」は彼女の反撃に戸惑い、一瞬、クラクラと後ずさりしましたが、すぐに元の千鳥足になって、こう言ったのです。

「ウツ、ああ、そうだよ。俺はあんたの言う通り、たしかに酔っ払んだよ。だけどよ、俺はよー、明日治るけど、お前は一生ブスじゃねえか！」

そう言ったとたん、ドアが開き、ふたりとも別々のドアから出ていきました。そのあと、乗客はみんな寝たふりをしていたのがおかしかったですが、それにしてもひどい「酔っ払い」でした。

ああ、そんな話をしたかったのではありません。

それは、ある夜の混んだ電車のなかの話です。鉢巻きに地下足袋、不精髭で、しかも、いかにも酒を飲んで酔っている感じのおじさんが乗ってきました。肉体労働でもしているのでしょうか、体もかなり大きかったそうです。

そのおじさん、乗客と乗客の間にほんの少しあった座席の隙間に無理やりお尻を割りこませました。「なんだよー」と割りこまれた乗客は思いましたが、文句は言えませんが、ちよっと怖い雰囲気もありましたから

ね。

すると、その右側の乗客が自分の身体を縮め、その「酔っ払い」のお尻が少しでも奥に入るように、ほんのちよっと広めの隙間をつくりました。すると、そのまた右側の人も体を細めます。「酔っ払い」の隣りの人は、自分と同じように身を縮めてくれた隣りの乗客に「ありがとう」と小声で言いました。これで、かなり隙間ができました。でも、その「酔っ払い」は動こうとしません。

右側の乗客は、「もう少し、奥まで入れますよ」と言いましたが、「酔っ払い」は余計なことはするなとばかり、動きません。すると、その人は、嫌がる「酔っ払い」の腕をしつかりとつかみ、「ほら、もっと奥まで腰を入れなさいよ。大丈夫だから」と強引に深く座らせました。

ほかの乗客は一瞬、緊張します。

その時です。この「酔っ払い」が目につくばい涙を浮かべたかと思うと、その大粒の涙がポロポロとからの頬を伝わったのです。そしてその「酔っ払い」は、右の乗客に、こう言ったのです。

「俺、東京に出てきて二十年になるけど、こんなに親切にしてもらったのは初めてだ。ありがとう、ありがとう」

涙は汚い手で拭いても拭いても、いつまでも止まらなかったそうです。

この右側の親切な乗客、それは亡くなられた映画評論家、淀川長治さんでした。淀川さんは、最初、乗り込んできた時は「なんだ、この人は」と思ったそうですが、グイグイ押し込んでくることもなく、お尻だけちよっと入れて前屈みになっている髭づらの「酔っ払い」を見て、「ああ、この人は悪いひとじゃないな」と思ったそうです。

それより、自分が身体を細めた時、一緒に身を縮めてくれた自分の右隣のお客さんの行為が嬉しかったと言っています。

「酔っ払い」が降りる時、淀川さんが「また、逢いましょね、さよなら、さよなら……」と言ったかどうかわかりませんが、懐かしい声が聞こえてくるような話です。

元NHKの名アナウンサー、山川静夫さんのエッセイ集『名手名言』に出ていた話です。

ちなみに、淀川さんがお亡くなりになったのは、平成十年十一月十一日。もう十三年も前になるんですね。そして、最後に解説した映画は『用心棒』をリメイクしたアメリカ映画『ラストマン・スタンディング』（同年十一月十五日放送分）でした。

今月も、MOKU出版と著者三遊亭鳳豊師匠のご好意による転載です。

『絆』はやめたのでしょうか

この度の東日本大災害で、大津波のニュースを見た全国の人たちは、間を置かずに物心両面の援助をしました。現在、孫の龍祐も毎月後片づけに行っていますし、資材一式を携えて毎月餅つきに行っている人たちも身近にあります。

「困っている人を見過ごすわけには行かない」という思いやりの気持ちで、被害にあった人たちをどれ程元気づけることが、想像以上だと思います。

ところが放射能については、尻込みする人が多く「自分さえ良ければ」という悪い癖が出てしまったように思えてなりません。

風評被害に悩まされている農家や漁師さん、未だに我が家に帰れない人たちが沢山います。みんな同じ日本人です。例えば放射能で害があるとしても、私も一分を引き受けましょう、という気概を見せたいものです。

成田のお不動様では九月二十五日に、被害にあった陸前高田市の松で柴灯護摩を焚きました。その際の初穂料三百三十三万円を市長さんにお届けしたそうです。恐らく反対や心配の電話やメールが沢山届いたことでしょう。東京の石原知事も瓦礫の引き受けを始めました。安全確認の上のことだから、それでも反対する人には「黙れ」というくらい気概が必要とも言っていましたね。

